

# 命注いだ桜 満開心待ち

大病を患った男性が、桜の開花を自らの命に重ね合わせている。松江、安来両市境の通称・野路山（安来市日白町）にある300本の山桜を守る角清延さん（82）＝安来市日白町。新たな花見スポットにしようと、

植林の300本守る角さん(安来)



仲間と満開の桜を楽しみにする角清延さん  
〔中央〕＝安来市日白町

## 病押し仲間と世話続け

野路山は1950年代に桜1千本を植林。背丈ほどたばこ栽培が盛んで一面に畑が広がっていた。その後、高齢化で生産者が減り、荒れ果てて山林に戻る土地が増えていた。  
角さんは畑を荒らすまいと2002年に、妻・翠さん（81）や地元の中学生と山

仲間たちと山道を整備した。「自分の命はもって数年でも桜の寿命は100年以上続く」。命を吹き込み、満開の下に多くの人が集う姿を待ち望む。  
（坂本彩子）

者の反対を振り切り今月初めに退院したのは、すべて桜のためだった。  
「延命」しても何も残らん。でも桜に時間と体力を注げば、100年後も大勢に楽しんでもらえる」  
寿命が100年を超える山桜の世話のため、2日に1度、山に登る。山道の整備は進み、7年の歳月を経て800坪が舗装され、道幅は3倍に広がり、車での往来が容易となった。  
「清延さん、みんながてご（全伝い）するけん、最後までやろうや」。体調を心配する地元老人会の加藤昭彦さん（72）ら有志7人が、今年から桜周辺の草刈りを手伝う。多くの人に桜を見てもいいという角さんの夢が、いつしか地域の夢となった。  
30年後にはさらに枝が広がり、今の10倍以上の花をつけると思う。いわしはもうこの世から追い出されとるわ」と笑う。一緒に山桜を植えた翠さんは昨年、認知症と診断された。満開になれば花見に連れてこようと考えている。  
命を受け継いだ桜に、満開の時近づいている。